

## 第2節 調査結果からみた青少年の意識

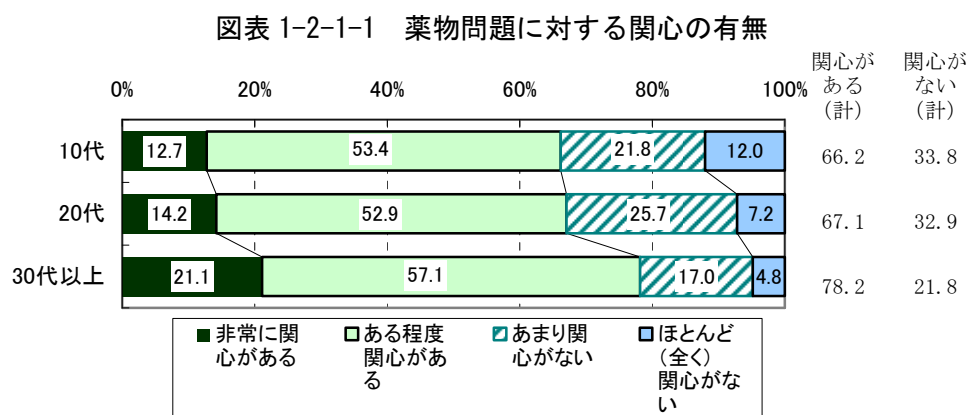
本調査は内閣府において実施したインターネット調査の結果を項目ごとに整理するものである。インターネット調査の特徴については、P.4で示しているとおおり、無作為性、代表性、サンプル抽出性、バイアス排除等に問題を有しており、また実施方法が異なる過去の調査との直接比較はでき得ないことに十分留意が必要である。

### 1. 青少年の薬物に対する意識や実態について

#### (1) 薬物問題に対する関心の有無、関心がある理由

##### 1) 薬物問題に対する関心の有無

年代が高くなるほど薬物への関心は高くなっている。10代、20代では関心がある人（「非常に関心がある」＋「ある程度関心がある」）は3人に2人（10代66.2%、20代67.1%）であるが、30代以上では約8割（78.2%）に達している。



なお、代表性のある無作為抽出で内閣府が平成18年に実施した「薬物乱用に関する世論調査」（以下、「平成18年調査」という。調査概要は以下の通り。）を参考までにみると、例えば10代、20代の関心がある人は6割未満（10代54.8%、20代58.7%）であった。

#### 内閣府「薬物乱用に関する世論調査」（平成18年）

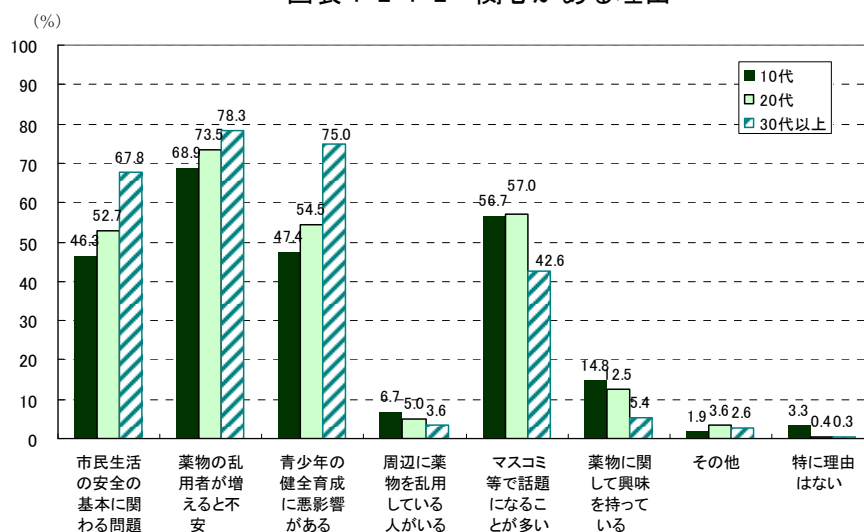
【調査概要】 調査対象 : 母集団 全国15歳以上の者  
 標本数 5,000人  
 抽出方法 層化二段無作為抽出法  
 調査方法 : 調査員による個別面接聴取法  
 調査時期 : 平成18年1月  
 有効回収数(率) : 2,623人(52.5%)

## 2) 薬物問題に関心がある理由

10代、20代では、薬物問題が「市民生活の安全の基本に関わる」という認識や、「青少年の健全育成に悪影響がある」といった社会的な認識は30代以上と比べて低い、マスコミ等での話題による関心の惹起は10代、20代の方が高くなっている。

(参考までに「平成18年調査」においては、30～60代に関心がある理由で最も多かったのは青少年への健全育成への悪影響であった(30～50代では8割以上)。本調査では30～40代の回答は6～7割程度であったことが懸念される場所である。)

図表 1-2-1-2 関心がある理由



## (2) 薬物に関する知識の内容、薬物に関する知識の情報源

### 1) 薬物に関する知識の内容

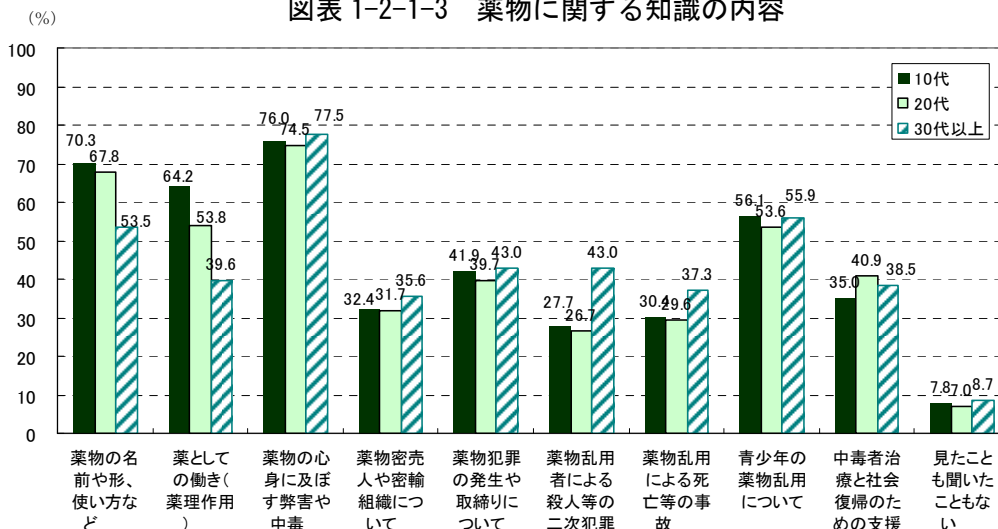
本調査では10代、20代、30代以上とも7割以上が「薬物の心身に及ぼす影響や中毒」について見聞きしていると回答した。

また、10代、20代では「薬物の名前や形、使い方など」や「薬としての働き(薬理作用)」といった学術的知識は30代以上と比べて上回っていた。一方、10-20代\*の有職・無職では10-20代の就学者に比べて学術的知識は低くなっている。

\*「10-20代」と表記した場合は「10代と20代の合計」を意味している。(以下、同様)

(参考までに「平成18年調査」においては、いずれの年代も「薬物の心身に及ぼす影響や中毒」を見聞きしていると回答した人は7割未満で、10代、20代では6割程度(10代61.3%、20代59.8%)であった。「薬物の心身に及ぼす影響や中毒」に関する認知度が上がっている可能性がある。)

図表 1-2-1-3 薬物に関する知識の内容

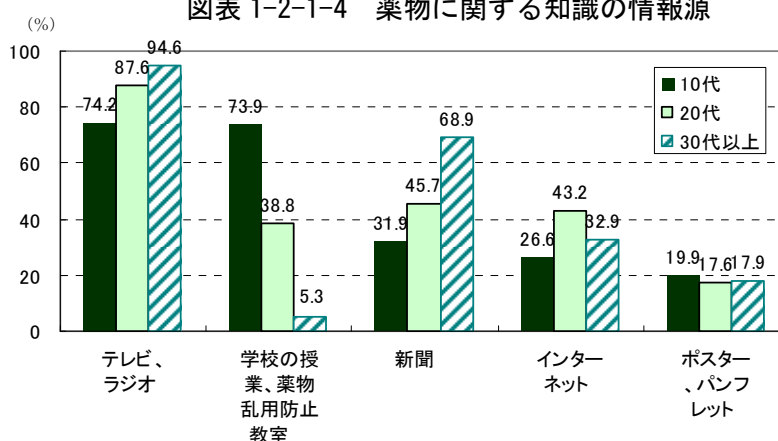


## 2) 薬物に関する知識の情報源

見聞きした人の薬物に関する知識の情報源の上位項目は以下のとおりである。「テレビ・ラジオ」や「新聞」は年代が低いほど情報源としての利用が少なくなっている。一方、「学校の授業、薬物乱用防止教室」は20代で約4割(38.8%)、10代では7割以上(73.9%)が挙げている。なお、「インターネット」は20代では4割を超える(43.2%)情報源となっており、今後の広報・啓発活動の方向性を考える上で特に注目される。

(参考までに「平成18年調査」においては、「学校の授業、薬物乱用防止教室」は10代72.6%、20代41.6%、「インターネット」は10代8.2%、20代15.9%、「テレビ・ラジオ」は10代75.5%、20代93.1%、「ポスター・パンフレット」は10代28.2%、20代24.9%となっている。)

図表 1-2-1-4 薬物に関する知識の情報源



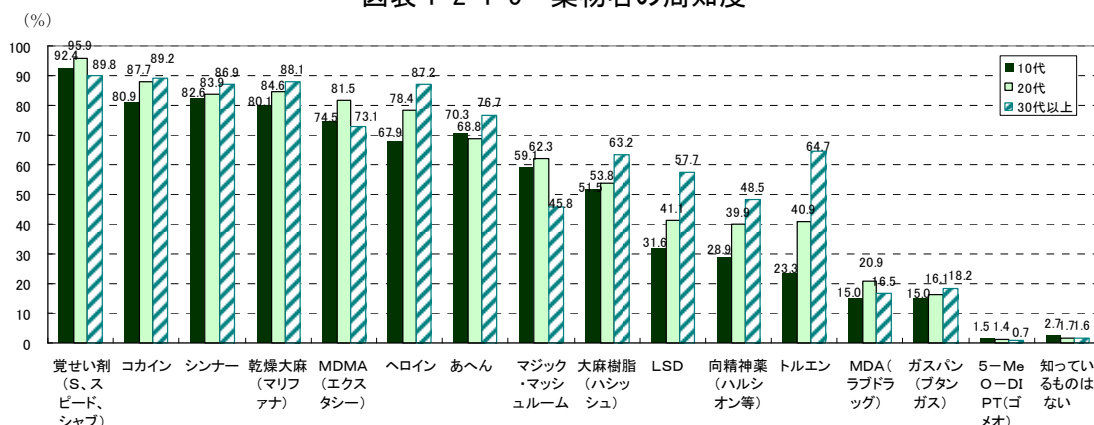
### (3) 薬物に対する認識

#### 1) 薬物名の認知度

10代、20代ともに30代以上より認知が高いのは「覚せい剤」、「MDMA」、「マジック・マッシュルーム」であった。

(参考までに「平成18年度調査」と比べると、10代、20代とも「乾燥大麻(マリファナ)」、「MDMA」、「マジック・マッシュルーム」、「向精神薬(ハルシオン等)」の認知度は高くなった可能性がある。特に「MDMA」の認知度向上は大きいものとする。) )

図表 1-2-1-5 薬物名の周知度

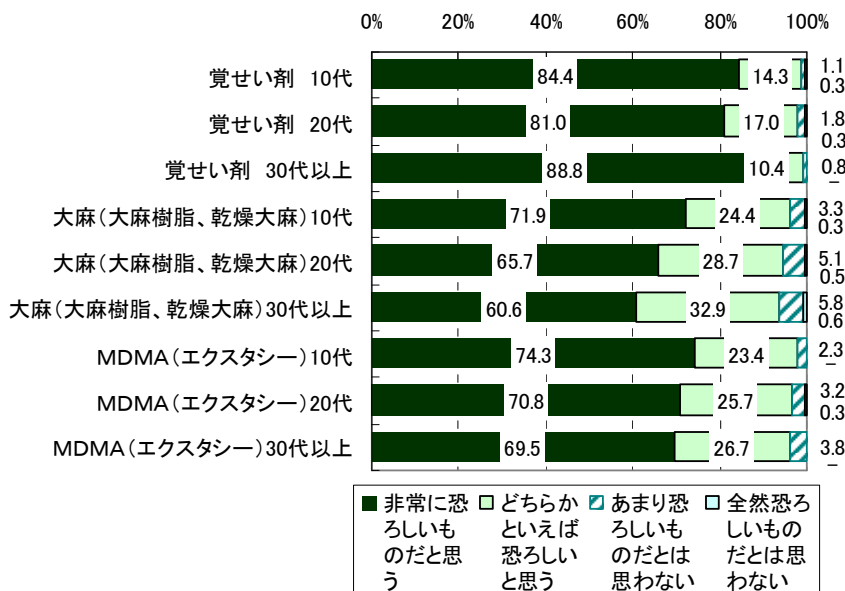


#### 2) 覚せい剤、大麻、MDMAに対する認識

「非常に恐ろしいものだと思う」という回答は、覚せい剤が最も高く、次いで、MDMA、大麻の順であった。大麻、MDMAとも年代が低いほど恐ろしいという認識があった。10-20代の学校での薬物乱用防止学習の有無でみると、覚せい剤、大麻、MDMAとも、学習経験のある人ほど非常に恐ろしいという回答が多かった。

(参考までに「平成18年調査」においては、「非常に恐ろしいものだと思う」という回答は、覚せい剤では10代89.0%、20代84.8%、大麻では10代82.3%、20代69.6%であった。)

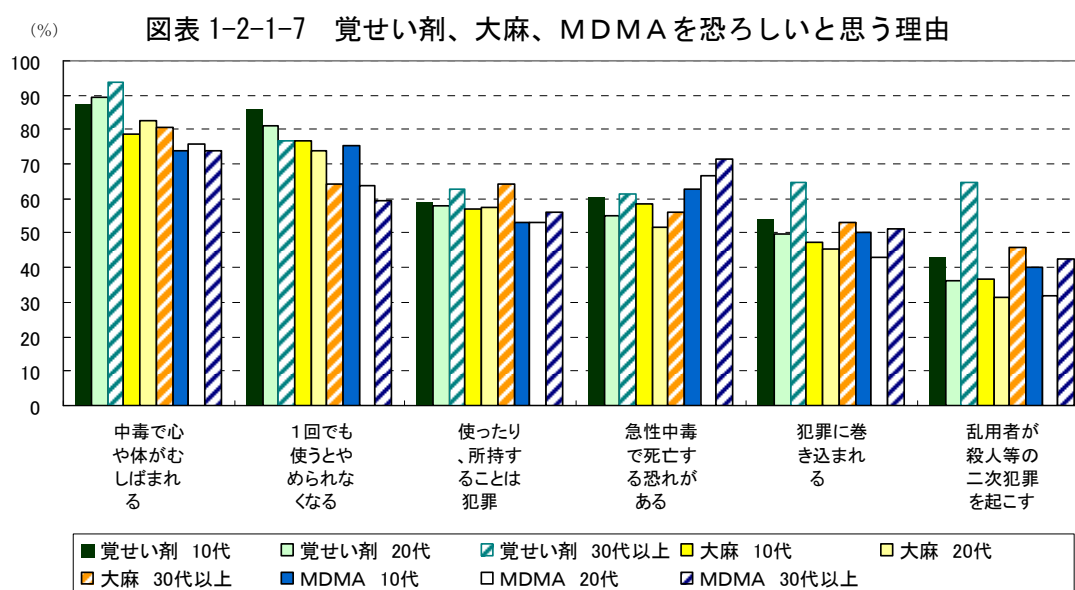
図表 1-2-1-6 覚せい剤、大麻、MDMAに対する認識



### 3) 覚せい剤、大麻、MDMAを恐ろしいと思う理由

覚せい剤、大麻、MDMAを恐ろしいと思う（「非常に恐ろしいものだと思う」+「どちらかといえば恐ろしいと思う」）人の、恐ろしいと思う理由は以下のとおりであった。覚せい剤、大麻、MDMAで「中毒で心や体がむしばまれる」の回答を比べると、各年代とも覚せい剤が最も多く認知され、次いで大麻、MDMAの順であった。「1回でも使うとやめられなくなる」も覚せい剤、大麻、MDMAの順であるが、年代差もみられ、いずれも10代が最も多く、次いで、20代、30代以上の順となっていた。また、10・20代について学校での薬物乱用防止学習の有無でみると、覚せい剤、大麻、MDMAとも学習経験のある人ほど多くの理由を回答している傾向がみられた。

（参考までに「平成18年調査」においては、覚せい剤における10代の「中毒で心や体がむしばまれる」（73.7%）、「急性中毒で死亡する恐れがある」（44.9%）、「犯罪に巻き込まれる」（41.5%）の3つの理由と、大麻における10代の「1回でも使うとやめられなくなる」（65.2%）の理由、MDMAにおける20代の「急性中毒で死亡する恐れがある」（46.5%）の理由は、本調査の結果の方が高い可能性がある。）

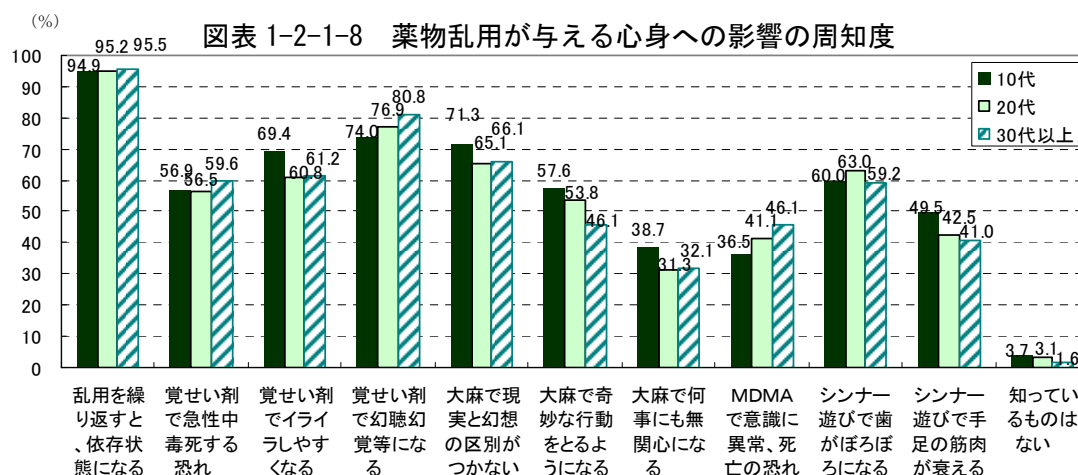


\*大麻では「急性中毒で意識障害をおこす恐れがある」、「所持することは犯罪」と選択肢がやや異なる  
\*項目が多いため%の値の表示は省略した

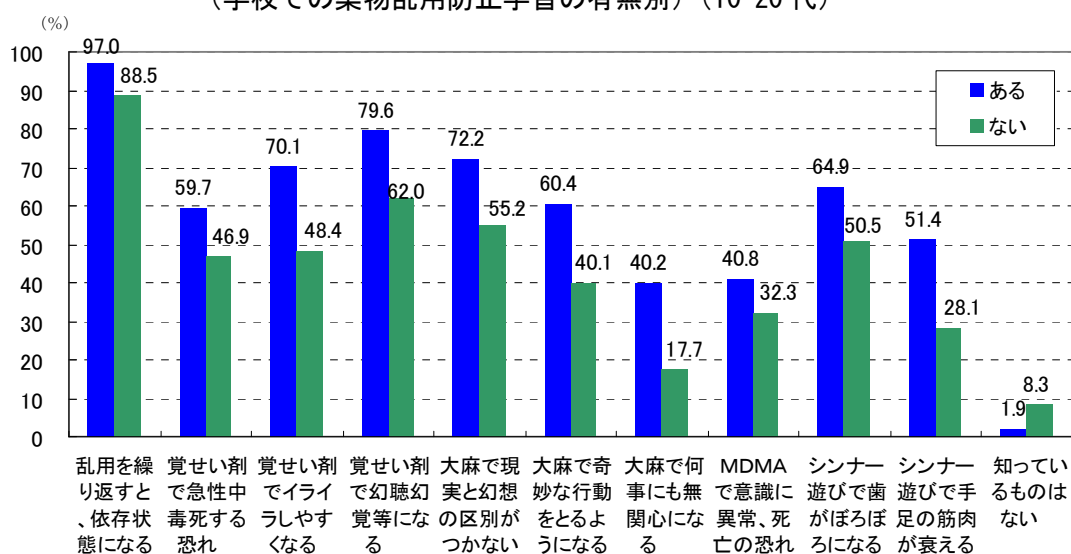
### 4) 薬物乱用が与える心身への影響の周知度

本調査では、質問の後半で再度回答者全員に薬物の心身に与える影響に関する知識を聞いた。「薬物乱用を繰り返すと、依存状態になる」は、すべての年代で95%程度が知っている」と回答し、年代の差は見られなかった。「大麻で現実と幻想の区別が付かない」、「大麻で奇妙な行動を取るようになる」、「大麻で何事にも無関心になる」という大麻に関する3項目はいずれも10代が最も多かった。

また、10-20代について学校での薬物乱用防止学習の有無でみると、すべての項目で学習経験がある人の方が理解度が高かった。



図表 1-2-1-9 薬物乱用が与える心身への影響の周知度  
(学校での薬物乱用防止学習の有無別) (10-20代)



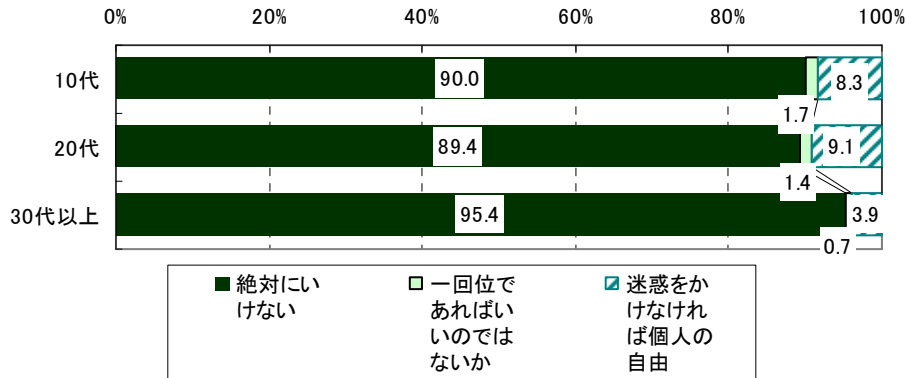
#### (4) 薬物乱用に関する意識や実態

##### 1) 薬物乱用に対する認識

30代以上に比べて、10代、20代の「どのような薬物であろうと、どのような理由であろうと絶対にいけない」という回答はやや低かった。男性はいずれも8割台であり(10代男性88.1%、20代男性86.1%)、10-20代の有職・無職(87.1%)も同様に低かった。

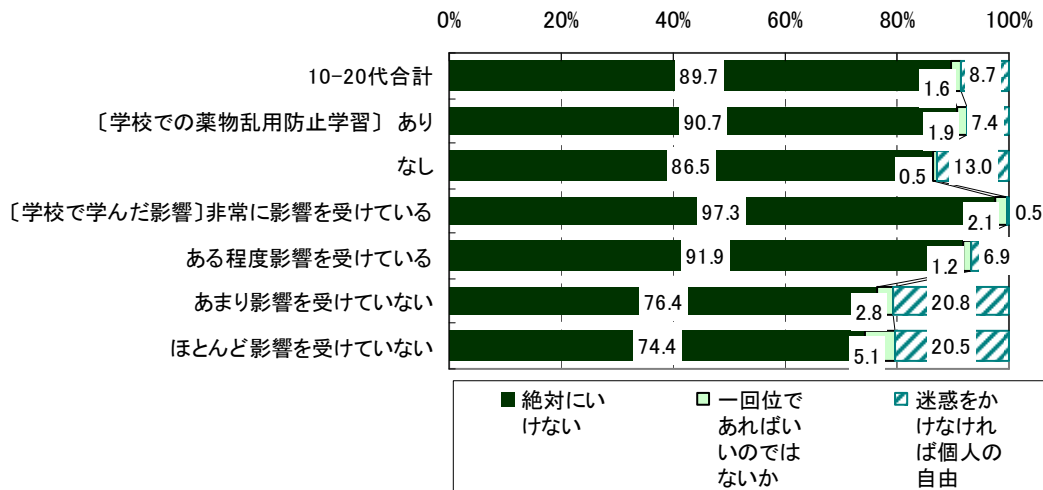
(参考までに「平成18年調査」においては、10代の「どのような薬物であろうと、どのような理由であろうと絶対にいけない」は91.1%、20代は90.6%であった。)

図表 1-2-1-10 薬物乱用に対する認識



10-20代では、「どのような薬物であろうと、どのような理由であろうと絶対にいけない」という回答は学校での薬物乱用防止学習経験がない人よりある人の割合が高かったが、学習経験ある人でも影響の度合いによって意識に差がみられた。

図表 1-2-1-11 薬物乱用に対する認識（10-20代）  
（学校での薬物乱用防止学習の有無別、学校で学んだ影響別）



続いて、10-20代について、「どのような薬物であろうと、どのような理由であろうと絶対にいけない」と回答した層と、「一回くらいであれば体に害はなさそうなので、いいのではないか」及び「他人に迷惑をかけなければ個人の自由である」と回答した層に分けて、本調査のF8自尊心尺度の10質問の総得点を算出し、有意差検定（t検定）を行なった。

その結果、『規範意識の高い層は規範意識の低い層より、自尊心尺度（F8の得点）が有意に高い』という結果が得られた。先行研究においては、「一回くらいであれば体に害は

なさそうなので、いいのではないか」及び「他人に迷惑をかけなければ個人の自由である」という回答者層は将来の薬物乱用の危険性が危惧される心的状況にあるともいわれており、これらの層の自己肯定の意識をどのように醸成していくかが重要である。

図表 1-2-1-12 自尊心尺度検定結果

		等分散性のための Levene の検定		2つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間	
									下限	上限
SUM	等分散を仮定する。 等分散を仮定しない。	.052	.820	2.918	822	.004	2.51	.861	.822	4.201
				2.945	104.772	.004	2.51	.853	.821	4.203

## 2) 薬物乱用を誘われた場合の行動

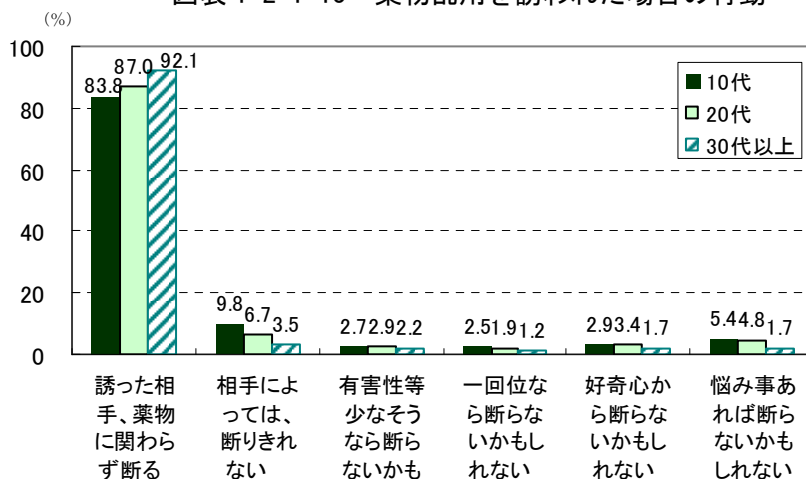
本調査で「誘った相手が誰であろうと、どのような薬物であろうと断る」という割合は、10代 83.8%、20代 87.0%であった。30代以上に比べ、10代、20代の「断る」という回答は低かった。

一方、「誘った相手によっては、断りきれないかもしれない」や「悩み事があつたり、疲れていたりしたら断らないかもしれない」などの回答は、年代が低いほど割合が高くなる傾向がみられた。特に、「誘った相手によっては、断りきれないかもしれない」は、10代 (9.8%) では約 1 割に達し、10代女性 (10.7%)、10-20代の無職 (13.0%) も 1 割以上と高かった。

また、10-20代について薬物乱用に対する認識別にみると、一回くらいであればいいのではないか、他人に迷惑をかけなければ個人の自由であるという認識の人では「誘った相手が誰であろうと、どのような薬物であろうと断る」の回答が低かった。

なお、10-20代では、学校で学んだ影響や学校以外で学んだ影響が強いほど「誘った相手が誰であろうと、どのような薬物であろうと断る」の回答が高くなる結果がでていた (いずれも、非常に影響を受けている人では 9 割以上が「断る」と回答)。

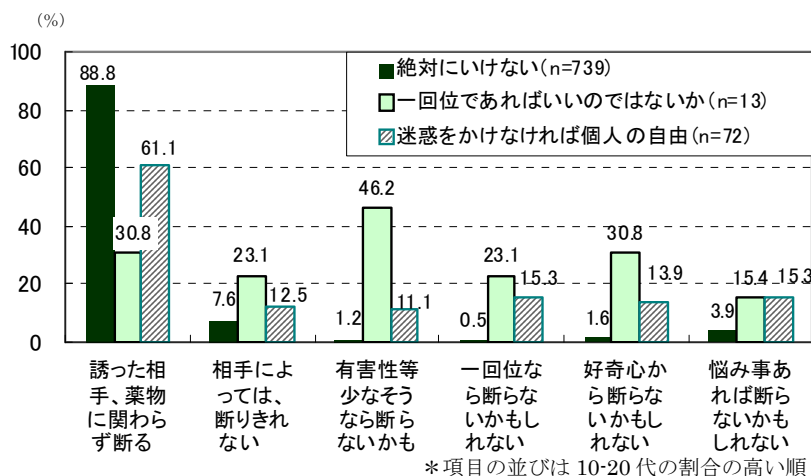
図表 1-2-1-13 薬物乱用を誘われた場合の行動



\* 項目の並びは 10-20 代の割合の高い順



図表 1-2-1-14 薬物乱用を誘われた場合の行動（薬物乱用に対する認識別）（10-20代）



### 3) 薬物を使ってみたいと思ったことの有無、理由

本調査で「今までに薬物を使ってみたいと思ったことがある」と回答した10代は23人(5.6%、男11人、女12人)、20代は32人(7.7%、男15人、女17人)いた。学職別では、高校生が12人(男6人、女6人)、短大・大学・大学院生(以下、「大学生」という。)が10人(男4人、女6人)、有職が27人(男14人、女13人)、無職が6人(男2人、女4人)であった。

10-20代について薬物乱用に対する認識別にみると、「ある」は「一回くらいであればいいのではないか」、「他人に迷惑をかけなければ個人の自由である」という認識の人で顕著に高くなっていた。

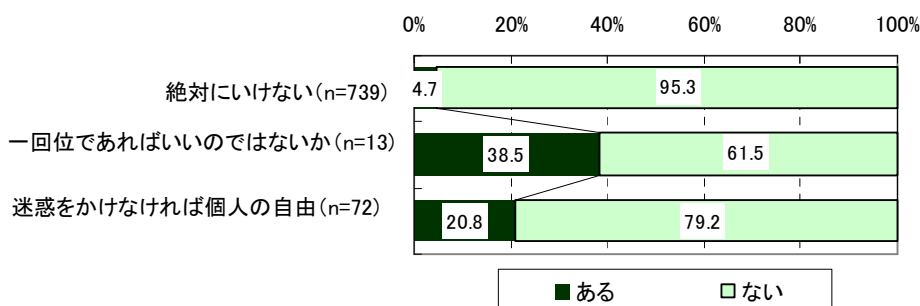
(参考まで、平成11年に実施した「薬物乱用に関する世論調査」(以下、「平成11年調査」という。調査概要は以下の通り。)においては、10代の「ある」は1.9%、20代は3.0%となっていた。)

#### 内閣府「薬物乱用に関する世論調査」(平成11年)

【調査概要】

調査対象	: 母集団	全国15歳以上の者
	標本数	5,000人
	抽出方法	層化二段無作為抽出法
調査方法	: 調査員による個別面接聴取法	
調査時期	: 平成11年11月	
有効回収数(率)	: 3,548人(71.0%)	

図表 1-2-1-15 薬物を使ってみたいと思ったことの有無（薬物乱用に対する認識別）（10-20代）



続いて、10-20代について、今までに薬物を使ってみたいと思ったことが「ある」と回答した層と「ない」と回答した層に分けて、本調査のF8自尊心尺度の10質問の総得点を算出し、有意差検定（t検定）を行なったところ、『「ない」と回答した層は「ある」と回答した層より、自尊心尺度（F8の得点）が有意に高い』という結果が得られ、薬物の規範意識に関する質問と同様の結果となった。

現在学校で使われている薬物乱用防止教育の指導資料の中でも、「薬物乱用行動を助長する様々な要因」として『健全な自尊心（自分自身を大切にする気持ち）』の重要性がわかりやすく記述されており、自尊心を巡る心理的なアプローチによる取組も図られ、また、学校医やスクールカウンセラーなどによる個別の支援がなされている。しかし、学校教育の場だけで単独で取組むには限界がある。家庭、行政、専門機関（医療機関、心理カウンセラー、福祉関係者など）、地域社会などの様々な主体との連携が必要である。

図表 1-2-1-16 自尊心尺度検定結果

		独立サンプルの検定								
		等分散性のための Leveneの検定		2つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間	
									下限	上限
F8. 総得点	等分散を仮定する。	15.255	.000	-3.529	822	.000	-3.69	1.046	-5.747	-1.639
	等分散を仮定しない。			-2.722	58.302	.009	-3.69	1.357	-6.409	-.977

#### 4) 薬物を使ってみたいと思った理由

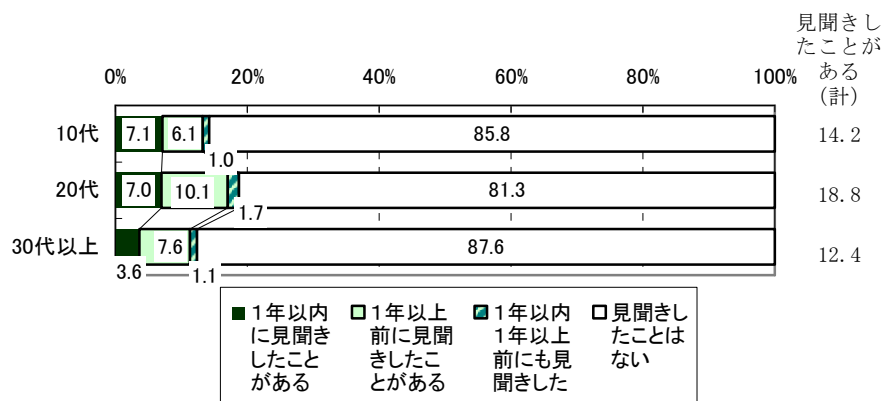
今までに薬物を使ってみたいと思ったことがある10 - 20代(55人)の理由をみると、「好奇心」(40人、72.7%)が最も多く、次いで「面白半分」(16人、29.1%)「疲れをいやすため」(14人、25.5%)であった。20代(32人)では上位3項目以外に1割を超えるものはないが、10代(23人)では、「学校が面白くないから」(7人、30.4%)、「インターネットの情報で興味を持ったから」(7人、30.4%)、「家庭が面白くないから」(5人、21.7%)、「本、雑誌などの情報で薬物に興味を持ったから」(3人、13.0%)も1割を超えていた。

#### 5) 薬物乱用の見聞きの有無

3年以内に周囲で薬物を使っている人がいるようなことを見聞きしたことがあると回答した人は、20代(18.8%)が最も多かった。また、女性の20代(20.7%)や10-20代の有職者(20.8%)では2割を超えていた。

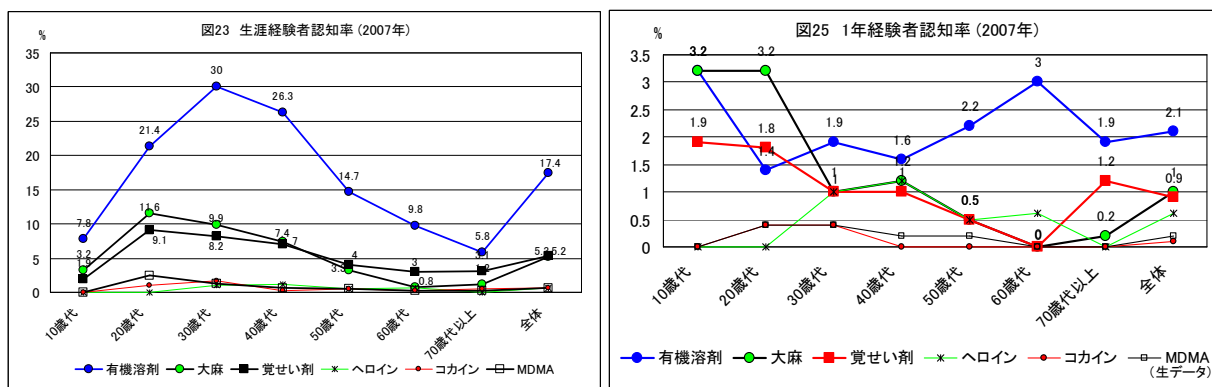
(参考までに「平成11年調査」においては、3年以内に見聞きしたことがある人は、10代では18.7%、20代では16.3%であった。)

図表 1-2-1-17 薬物乱用の見聞きの有無



なお、国立精神・神経センターにおいては平成 19 年に「薬物使用に関する全国住民調査」(調査概要は以下のとおり)を実施しているが、これによると、年代別の「生涯経験者認知率(これまでに薬物を乱用したことがある人を身近に知っているか)」は、以下の図のとおりである。有機溶剤は 10 代で 7.8%、20 代では 21.4%に達していた。また、特に大麻と覚せい剤は、20 代(大麻 11.6%、覚せい剤 9.1%)における率がすべての年代の中で、最も高い報告であった。また、「1 年経験者認知率」でも、有機溶剤は 10 代で最も高く、大麻と覚せい剤は 10 代、20 代で高いことが報告されている。

図表 1-2-1-18 生涯経験者認知率、1 年経験者認知率



国立精神・神経センター平成 19 年度厚生労働省科学研究費補助金  
「薬物使用に関する全国住民調査」(平成 19 年)

【調査概要】

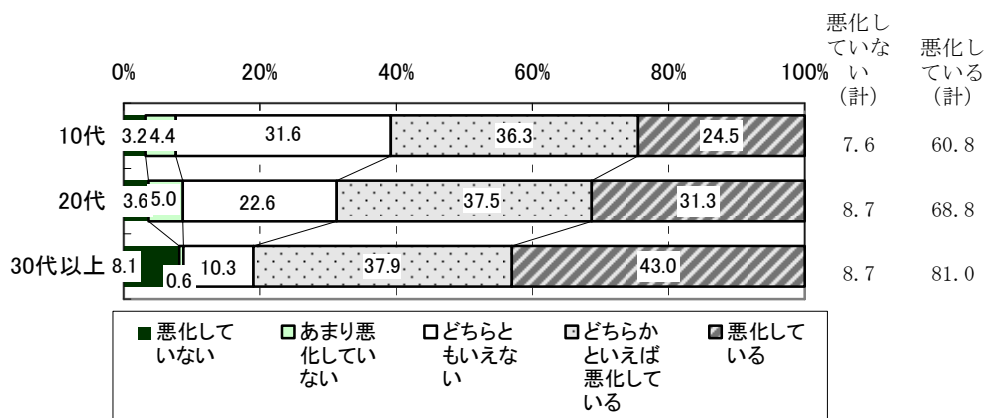
調査名 「飲酒・喫煙・くすりの使用についてのアンケート調査」  
 調査対象 : 母集団 全国 15 歳以上の者  
 標本数 5,000 人  
 抽出方法 層化二段無作為抽出法  
 調査方法 : 調査員による個別面接聴取法  
 調査時期 : 平成 19 年 9 月  
 有効回収数(率) : 2,948 人 (59.0%)

## 6) 薬物犯罪の情勢に対する認識

年代が高いほど悪化しているという認識が高く、10代では悪化している（「悪化している」＋「どちらかといえば悪化している」）と感じている人は約6割（60.8%）、20代が約7割（68.8%）、30代以上では約8割（81.0%）に達していた。

（参考までに「平成18年調査」においては、悪化していると感じている10代は75.0%、20代は72.8%であった。）

図表 1-2-1-19 薬物犯罪の情勢に対する認識



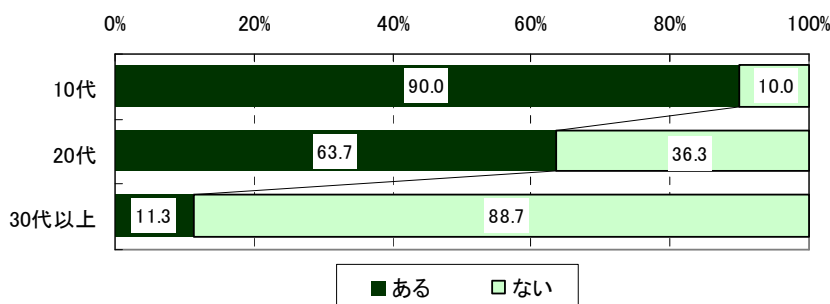
## 2. 薬物乱用防止教育・啓発について

### (1) 学校での薬物乱用防止教育

#### 1) 学校での薬物乱用防止学習の有無

30代以上では学校での薬物乱用防止学習経験のある人は1割であったが、20代で6割以上、10代では9割であった。学職別に見ると「学校で学んだことがある」と回答した高校生は91.3%、大学生も90.2%と高かった。

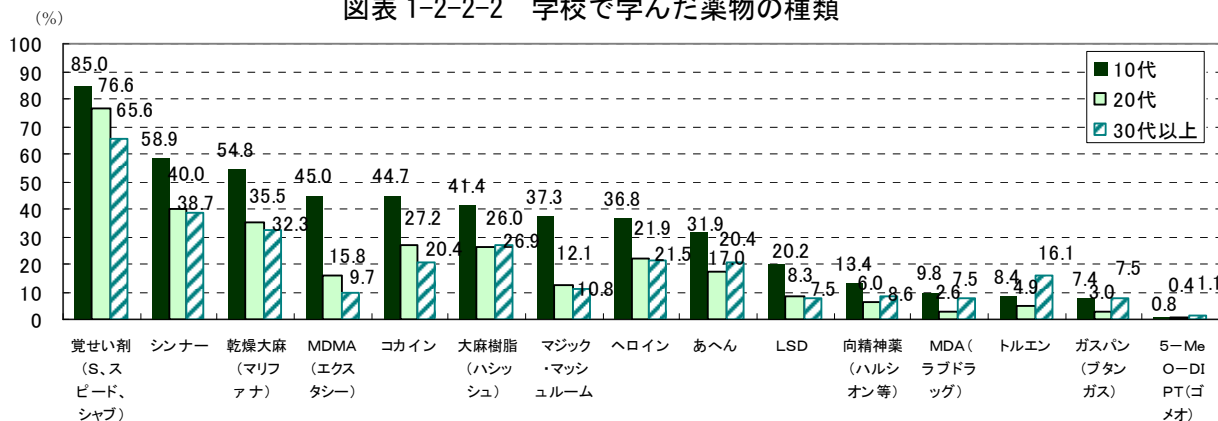
図表 1-2-2-1 学校での薬物乱用防止学習の有無



#### 2) 学校で学んだ薬物の種類

「トルエン」、「ガスパン」、「5-MeO-DIPT (ゴメオ)」を除く全ての項目で、20代、30代よりも10代が最も回答率が高かった。なお、10代の回答数の平均は5.1個であったが、高校生では5.8個回答しており、すべての項目で高校生が最も高い回答率を示した。また、10-20代の学校で学んだ影響別にみると、影響を受けたと回答した人は受けていないと回答した人よりすべての項目で回答率が高かった。

図表 1-2-2-2 学校で学んだ薬物の種類

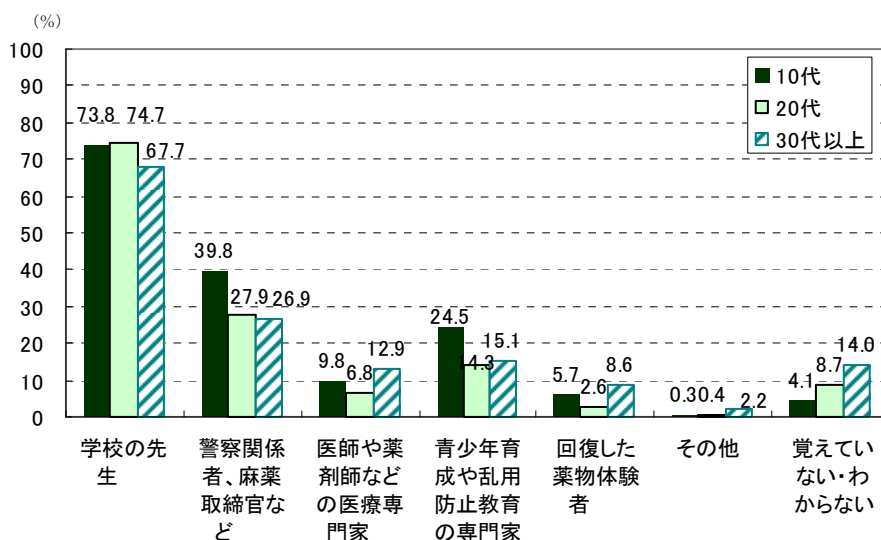


\*項目の並びは10-20代の割合の高い順

### 3) 学校での薬物乱用防止教育の指導者

10代、20代の7割以上が「学校の先生」との回答であった。高校生や大学生では8割前後が「学校の先生」との回答であった。また、10代では「警察関係者、麻薬取締官など」や「青少年育成や薬物乱用防止教育の専門家」の回答率も高くなっていた。

図表 1-2-2-3 学校での薬物乱用防止教育の指導者



\*項目の並びは10-20代の割合の高い順

(参考までに文部科学省がとりまとめた外部講師を招いて開催した薬物乱用防止教室の開催状況は、平成20年度は小学校で37.5%、中学校で58.4%、高等学校64.1%であった。)

図表 1-2-2-4 外部講師による薬物乱用防止教室の開催状況

学校種	H13		H16		H19		H20	
	開催校数	開催率 (%)	開催校数	開催率 (%)	開催校数	開催率 (%)	開催校数	開催率 (%)
小学校	4,554	19.5	6,155	27.1	7,633	34.5	7,984	37.5
中学校	5,945	53.8	6,039	55.5	5,971	55.7	6,107	58.4
高等学校	3,612	64.8	3,274	62.7	3,039	61.2	3,084	64.1
中等教育学校	1	100.0	7	41.2	8	25.8	16	44.4

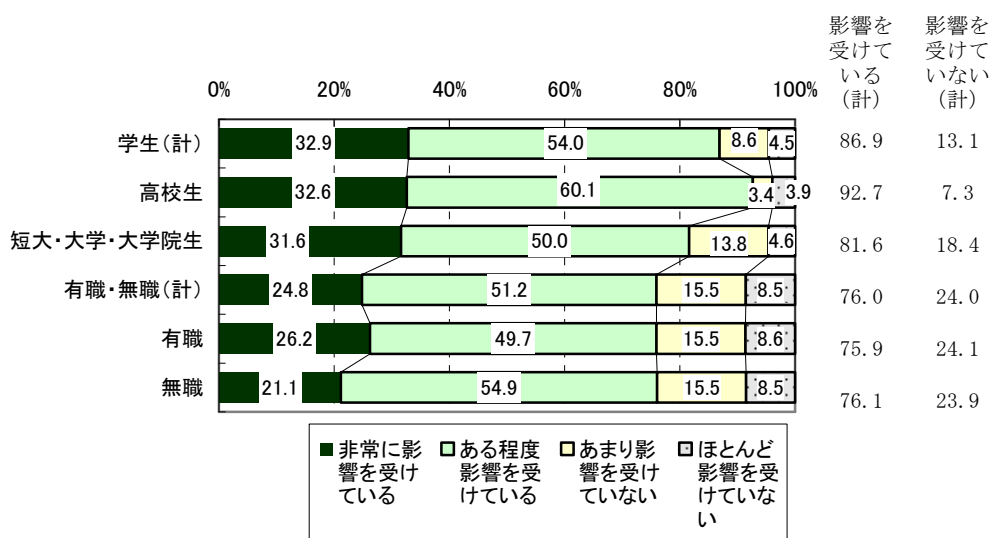
出典: 文部科学省調べ

### 4) 学校での薬物乱用防止教育の影響

10-20代の学職別にみると、高校生では9割以上、大学生でも8割以上が、現在の認識や意識に「影響を受けている」との回答であった。一方、10-20代の有職・無職では影響を受けていると回答した人は4分の3程度でやや低かった。

なお、自尊心尺度 (F8) による有意差検定 (t検定) の結果では、『影響を受けている層は影響を受けていない層より、自尊心尺度 (F8 の得点) が有意に高い』という結果が得られた。

図表 1-2-2-5 学校での薬物乱用防止教育の影響（学職別）（10-20 代）



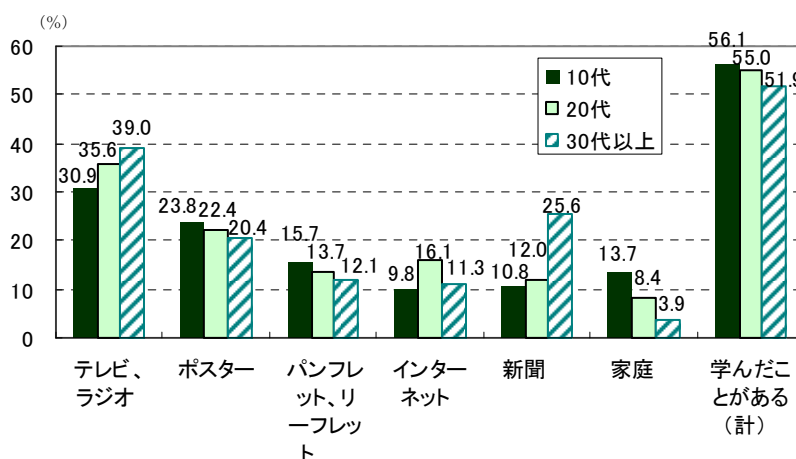
(2) 学校以外での薬物乱用防止教育

1) 学校以外での薬物乱用防止教育・啓発の有無

学校以外で受けた薬物乱用防止教育・啓発を 10-20 代での回答率の高い順で並べたのが下の図である。「テレビ・ラジオ」は年代が低いほど回答率が低くなるが、いずれの年代でも最も高い回答率であり、学校以外の薬物乱用防止教育・啓発の媒体として最も重要であった。また、「ポスター」、「パンフレット、リーフレット」は比較的年代による回答率の差が少なかった。「インターネット」は 20 代で率が高かった。「家庭」は 10 代、20 代とも 1 割前後であった。

いずれの年代も学校以外での薬物乱用防止教育・啓発を受けたと回答した人は 5 割台にとどまっていた。特に、学校を卒業した 10-20 代の有職・無職は「インターネット」以外のすべての項目で 10-20 代の平均より率が低くなっていた。

図表 1-2-2-6 学校以外での薬物乱用防止教育・啓発の有無（上位 6 項目）



\* 項目の並びは 10-20 代の割合の高い順

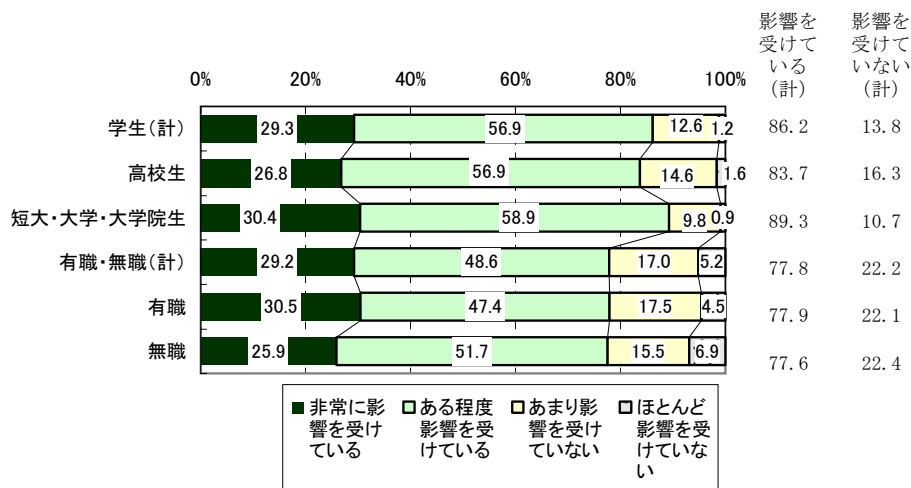
## 2) 学校以外の薬物乱用防止教育・啓発の影響

20代の「非常に影響を受けている」人は2割台(27.1%)で、影響を受けている人(非常に+ある程度)も8割未満(78.6%)と他の年代に比べて割合が低い。

なお、自尊心尺度(F8)による有意差検定(t検定)の結果では、『影響を受けている層は影響を受けていない層より、自尊心尺度(F8の得点)が有意に高い』という結果が得られた。

一方、10-20代の学職別で学校での薬物乱用防止教育の影響の回答と比べると(P.27~28参照)、有職・無職では、学校の教育に非常に影響を受けたという回答より、学校以外での教育・啓発に非常に影響を受けたという回答の割合が高かった。

図表 1-2-2-7 学校以外の薬物乱用防止教育・啓発の影響(学職別)(10-20代)



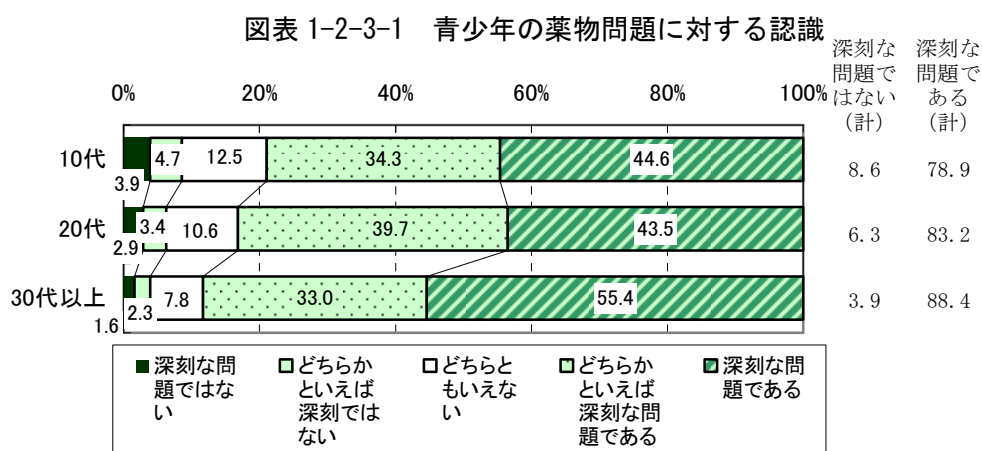


### 3. 青少年の薬物問題

#### (1) 青少年の薬物問題に対する認識

年代が上がるほど「深刻な問題である」と感じている人（「深刻な問題である」＋「どちらかといえば深刻な問題である」）の割合が高くなっていった（10代 78.9%、20代 83.2%、30代以上 88.4%）。一方、10-20代の男性に限ってみると、「深刻な問題ではない」と感じている人（「深刻な問題ではない」＋「どちらかといえば深刻な問題ではない」）が1割（10.7%）であった。

（参考までに「平成18年調査」においては、「深刻な問題である」と感じている10代、20代は約9割（10代 87.9%、20代 91.7%）であった。）



#### (2) 青少年が薬物を乱用する理由

10代、20代、30代以上とも、上位4項目は同じであるが、30代以上の割合が顕著に高くなっていった。「青少年に社会のルールを守る意識が不足」は30代以上では第5位であるが、5割を超えていた。他の項目も30代以上の割合が高い項目が多かった。

